Vol. 21

苗場山麓ジオパーク

振興協議会だより

［発行日］令和８年１０月３０日
［発　行］苗場山麓ジオパーク推進室
［お問い合わせ］025-765-1600

第14回日本ジオパークネットワーク中部ブロック大会in佐渡

令和８年９月７日（月）～８日（火）の２日間にわたり、佐渡市両津の道の駅「あいぽーと佐渡」にて、第 14 回中部ブロック大会が実施され、全国８地域から 33 名が当大会へ参集し、苗場山麓ジオパークからは事務局２名とガイド５名の計７名が参加しました。

当大会の目的は、「佐渡ツーリズムの掘り起こし」という内容でテーマが組まれました。佐渡ツーリズムにおいて、既存の観光商品である①「トキ」と自然環境、②歴史文化の散策、③加茂湖カヤック体験のルートが、『ジオツーリズムとして展開するためにはどのように行えばよいか』を佐渡ジオガイドからヒントとなる素材をグループ間で体験・収集し、２日目に各々でまとめた内容を基にグループ発表を行いました。これらの観光商品は、どれも『ジオパークという名がついていない』普通の観光コースであるものの、今後、ジオ活動を発展させることを期待させるものでもあります。

佐渡市は、自然環境や歴史文化、生物等といった貴重な資源に恵まれています。中でも、令和６年７月に登録された世界文化遺産「佐渡島の金山」は正式に登録されるまでの間、多大な苦労がありました。

「佐渡金山」の登録推進に関して、1997 年に筑波大学と民間の動きで登録の取組が始まり、その９年後、世界遺産推薦公募が開始、県と佐渡市が支援した結果、県文化行政課へ職員の配置が行われました。2010 年には世界遺産暫定一覧表の記載を行い、2015 年から推薦書の原案が提出されましたが、内容の擦合せ不一致により５回ほど選外となりました。その後、国の文化審議会で国内候補に選定され、UNESCO へ推薦書を再提出、2023 年に ICOMOS による現地調査と推薦書に基づいたデスクレビューが実施されました。しかし、「資産範囲の修正」と「緩衝地帯の拡張」等の勧告を受け、追加情報の記載した修正案を作成し提出することで、翌年開かれた世界遺産委員会で「世界遺産登録」となりました。有志らによる取組開始から登録に至る迄、なんと 26 年という長い年月を経た推進活動となったのです。

「佐渡金山」世界遺産登録は、他の地域で機械化が進む時代に、より高度な手工業による採掘と選鉱や製錬等を続けた一連の技術が 16 世紀に実施されたこと、つまり「文化的伝統」と「科学技術」の２つの物証がその理由でした。

当大会の歴史文化コース（③）に参加したＤ・Ｅグループの発表で『心が動いたところや魅力だったポイント』について、「あれだけのものを人の手で掘り上げたことに感動した」、「鉱山ができた地理的アピールが分かった」等、肯定的な意見を聞くことができました。

『各観光コースをジオツーリズム化し展開する』という今回の主題に当てはめれば、「ジオパーク」そのものが地質や地形等を分野とするため、この区分で集客が期待できるかといえば正直なところ難しい課題があります。とは言え、集客効果の期待値増加を見込み、ジオパークの側面を入れずに集客に繋げようとしてもうまくいきません。

「佐渡金山」は、砂金・鉱脈鉱床が他に類を見ない伝統的な手工業により行われたことや幕府の管理体制を古文書・絵巻等を歴史資料として説明できる反面、「佐渡島がどのようにしてできたのか」は地質学的区分となるため、ジオ要素を外した根拠説明はできません。『ジオツーリズムの展開』として、佐渡島ができた背景を地質で紐解き、金山に特化したガイドを養成することで、島の成り立ちと鉱山生活をリンクさせる物語を作ることができます。加えて平野である国中平野（旧新穂村）は大佐渡と小佐渡からの流出土砂により形成された地形が関係していることに加え、ここには多くの野生のトキが散見できる場所でもあります。「佐渡の成立」と「トキとの共生」、「金銀山」の資料を踏まえた１日コースを作ることによって、ジオ＋エコ＋カルチャーの要素を満たすことになります。



ジオツアーを発展させ観光者数の見込みを図る為に、ツアーが一過性のもので終わることがないよう気をつけなければなりません。その為には、専門スキルを身に着けた研究員やガイドの育成と助言、公共交通機関の有効連絡、情報発信と促進活動を充実させ、地域住民と協力しながらジオツーリズムの魅力を図っていくことが何よりも大切であると、当大会で学びました。

今回の収穫を踏まえ、当方の活動を再確認し、他地域交流に積極的に参加する必要があると感じました。

第８回 苗場山麓ジオパーク研究コンクール

令和元年度から始まったジオパーク研究コンクールも今年度で８回目となりました。毎年 100 人以上の参加者があります。今年度は、小学校４校、中学校 (含：中等教育学校) ２校、計６校の参加となりました。作品数は 64 作品で、参加者の延べ人数は、161 人と過去最多となりました。例年と同様に作品審査を行い、苗場山麓ジオパーク振興協議会会長賞、副会長賞、津南町・栄村両教育長賞、ジオパーク推進室長賞、ジオパーク賞及びジオパーク特別賞と合わせて 10 点の入賞作品を選定いたしました。会長賞に輝いたさかえ小中学校５年の山田夏穂さんの研究は、地域に生息する絶滅危惧種のアカハライモリについて、丹念に調べたことを作品にしてくれました。栄村には、このような生物がしっかり棲み付いていることを改めて教えられました。



全作品をなじょもんで審査しました

また、栄村教育長賞を受賞された津南小学校４年の志賀秋葉さんは、津南町埋蔵文化財センター「うもれあ」の近くにあるビオトープに生活する生物を丹念に調べ、写真に収めています。いずれも学校の夏休み期間において、生き物を楽しそうに観察している姿を想像させられる作品でした。

次年度は、津南町の小学校が２校統合する予定です。審査の方法や、コンクールの内容自体を検討することが必要になるかと思われますが、児童生徒の活動の姿や、発表の場をなくさずに維持していきたいと考えています。

第８回　苗場山麓ジオパーク研究コンクール　審査結果

賞　名	研究題名	名　前	学校名	学年
苗場山麓ジオパーク振興協議会会長賞	アカハライモリのもよう	山田 夏穂	さかえ小中学校	5
苗場山麓ジオパーク振興協議会副会長賞	火焔型ふう土器	半戸 蓮太	芦ケ崎小学校	3
津南町教育長賞	龍ヶ窪の植物調べ	古池 奏文	芦ケ崎小学校	3
栄村教育長賞	わたしの生き物写真集	志賀 秋葉	津南小学校	4
苗場山麓ジオパーク推進室長賞	ジオパークレポート	久保田 桜矢 桑原 兵悟 河野 椿 髙橋 もも 桑原 龍禅 高橋 雫 玉田 瑛士 中澤 ことは	津南中等教育学校	1
苗場山麓ジオパーク賞	たてあなしきじゅうきょのこうぞう	奥平 定継	津南小学校	2
苗場山麓ジオパーク特別賞	ジオサイト調べ	瀧澤 鈴	上郷小学校	5
苗場山麓ジオパーク特別賞	つなんジオパズル	本山 未遥	津南小学校	2
苗場山麓ジオパーク特別賞	数字で見る苗場山麓ジオパーク	江村 陽葵	津南小学校	6
苗場山麓ジオパーク特別賞	地域調べ探究レポート	全８グループ	津南中学校	2

受賞作品展示の様子（栄村役場２階）





認定ジオガイドが伝える

ここが好きだよジオパーク

認定ジオガイドがおすすめの場所、
もの、ことなどを紹介していきます。



武藤 大輔さん

自然を体感しています　（ガイドナンバー 85　武藤 大輔さん）

季節が巡るたび、私は自然の最もダイナミックな表情に会いに行きます。私の趣味は、夏は「沢登り」、冬から春にかけては「山スキー」。一見するとまったく異なるアクティビティに見えるかもしれませんが、この２つには共通する大きな魅力があります。それは「道なき道を、自らの判断と技術で切り拓く面白さ」です。一般的な登山道を歩くだけでは決して味わえない、自然との一体感と冒険の世界をご紹介します。

初夏から秋口にかけての相棒は、沢靴とハーネス、渓流竿です。沢登りは、川の源流を目指して岩場を攀じ登り、滝を越え、時には冷たい水に身を躍らせて進むスタイルの登山です。真夏の酷暑の中でも、ひとたび沢に入れば別世界。透き通った清流の水しぶきを浴びながら進む爽快感は格別です。滝壺のエメラルドグリーンや、苔むした岩々に差し込む光の美しさは、沢の中に立った者だけが見られる特別な景色です。

迫り来る大滝や急流を前に、「どこに足や手をかけるか」「どうルーティングするか」を試行錯誤しながら乗り越えたときの達成感は、日常では味わえないアドレナリンをもたらしてくれます。そして雪が山を包み込むと、道具をスキー板とシールに持ち替えます。



沢登り

リフトのあるゲレンデを飛び出し、自らの足で雪山を登り、誰も足を踏み入れていないオープンバーンや樹林帯へシュプールを描くのが山スキーです。静まり返った白銀の世界を、自分の息遣いと雪を踏みしめる音だけを聞きながら登っていく時間。山頂に立ったときに広がる大パノラマは、言葉を失うほどの美しさです。苦労して登ったご褒美は、極上のディープパウダーや春のザラメ雪を滑り降りる爽快感。風を切りながら真っ白な斜面に自分だけのラインを刻む感覚は、一度知ってしまうと病みつきになります。





山スキー

沢登りで登ったあの谷も、冬になれば深い雪に覆われ、山スキーのゲレンデへと姿を変えます。「夏に水をたどった場所を、冬は凍りついた雪の上として滑る」。山の四季の移り変わりを全身で体感し、１年を通じて自然のエネルギーをダイレクトに受け取ることができる。これこそが、私がこの２つの趣味を愛してやまない理由です。

もちろん、どちらも自然の厳しさと隣り合わせであり、緻密な観天望気やリスク管理が欠かせません。だからこそ、無事に下山し、温かい下山後の一杯や温泉に浸かる瞬間の幸福感も一塩です。

これからも安全を第一に、季節の風を感じながら、水と雪が織りなす素晴らしい世界を旅し続けていきたいと思います。

お知らせ

12月11日（金）　18:30～20:00
認定ガイドスキルアップ研修　苗場山麓ジオパーク基礎講座　会場：津南町総合センター

突撃しょぅ！となりのジオ便り～大雪山カムイミンタラジオパーク構想地域からこんにちは～



大雪山と上川盆地

大雪山カムイミンタラジオパーク構想地域は、北海道のほぼ中央に位置しており、旭川市、鷹栖町、東神楽町、当麻町、比布町、愛別町、上川町、東川町の行政区域からなります。本地域は、東に「北海道の屋根」と言われる大雪火山群、西に神居古潭帯を有し、その中央に上川盆地が広がっています。

「大雪山がもたらす豊かな大地と人々の物語」をテーマと、それを紐解く４つのストーリー「火山と多様な自然が生み出す生命の大地～大雪山～」「大雪山を源とする豊富な水と大地の恵み～上川盆地～」「大地の変動と人々の歴史～神居古潭～」「カムイの大地に息づくアイヌ」の核となるのは、壮大な水の繋がりです。火山活動によって誕生した大雪山の山々は、雄大な景観をつくり出し、そこでは多種多様な動植物が育まれています。大雪山は広大で寒冷な気候を有する高山帯であるため、永久凍土が維持され「構造土」をはじめとした日本最大級の周氷河地形が発達しています。

また、森林限界が低く、独自の生態系が保たれています。高山植物の群落が広がり、氷河時代からの生き残りとも言われるナキウサギやウスバキチョウも生息しています。北海道最高峰の旭岳は、大雪火山の中で最も新しい山体で、現在も活発な噴気を上げており、活きている火山を実感できる場所です。



神居古潭

大雪山に降り注いだ雨や雪は、川となって北海道最大の盆地である上川盆地へと流れていきます。肥沃な土壌と豊富な水は、農業や産業を支え、平らで広大な大地に多くの人が暮らしています。本地域には、米や酒、トマトやりんご、ラーメンやホルモンなど、美味しいグルメがいっぱいあります。そして、上川盆地を流れる川は、石狩川に合流し神居古潭へと流れていきます。石狩川によって削り作られた神居古潭の峡谷には、約１億年前のプレート活動によって形成された神居古潭変成帯が露出しています。この険しい峡谷は交通の難所でもあり、アイヌの人々は、特徴的な岩の形や甌穴を魔神の姿や足跡と考え、魔神が住んでいると伝えてきました。本地域には、各所にアイヌにまつわる場所があります。また、「アイヌの歴史と文化に出会う」をテーマとする旭川市博物館や日本最古で唯一の私立アイヌ資料館である川村カ子トアイヌ記念館があり、アイヌの人々の暮らしや文化を知ることができます。

多様で豊富な自然と文化を有する大雪山カムイミンタラジオパーク構想地域に是非お越しください。

鳥取環境大学環境学部・柚洞一央先生と学生の皆さんにお越しいただきました！



公立鳥取環境大学環境学部で地理学を教えている柚洞です。日本ジオパークの現地調査員を長年拝命していたことから、大学教育にジオパークのフィールドワークを取り入れています。この夏は、苗場山麓ジオパークを取り上げてみました。日本最大級の河岸段丘がある豪雪地で、人々はどのような暮らしをしているのか。学生たちが自ら風景を観察し、問いを立て、地域住民のみなさんから話を聞いてみるというものです。集合は JR 飯山線越後鹿渡駅。現地集合ですので、約 70 人の学生たちはそれぞれの手段で鳥取から苗場山麓へやってきました。旅費を節約するために鳥取から普通列車を一日かけて乗り継いだ学生や、夜行バスを使った学生がいたようです。生まれて初めて一人で県外に旅をしたという学生もいました。道中の車窓で感動している学生もいました。鳥取県と苗場山麓、同じ日本海側ですが、地形や気候が異なります。中国山地と比べると苗場山麓は、より奥深い険しい地形が多い印象です。積雪量も、鳥取は苗場山麓ほど多くありません。学生たちは、豪雪地域ならではの雪囲いの建物や消防水利栓看板の高さに驚いていました。

今回、苗場山麓で、学生たちがたくさんの地域住民の方々にお世話になりました。食事をご馳走してくださったり、クルマに乗せてくださったり、地域の昔話を丁寧に教えてくださった方もいたようです。参加した学生からは、「知らない人に話しかけてもいいんだと気付きました」「社会観や人生観が大きく変わりました」「今回のフィールドワークを通して、私は水を単なる自然資源として見るのではなく、土地の形成から農業、観光、地域の産業までをつなげるものとして考えるようになった」といった感想が寄せられました。学生たちは、インターネットでは手に入らない、現地ならではの情報に接することができました。偶然のなかで学ぶことの楽しさ、難しさを経験したと思います。

不躾な学生訪問に、心優しく対応してくださった苗場山麓の地域のみなさま、本当にありがとうございました。ジオパークは地域住民がつくるものです。みなさんの日々の暮らしそのものがジオパークにおける学びの素材です。みなさんの暮らしから、たくさんのことを学ぶことができました。ありがとうございました。